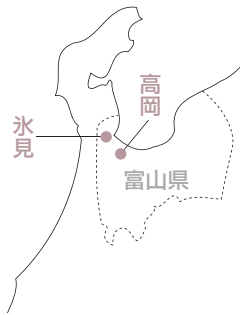


越中万葉

題字 中尾哲雄



万葉集を編纂した大伴家持は、天平十八年(七四六年)から五年間、越中の国守を務めました。当時の越中は、家持が「しなざる越」と詠んだように、奈良の都から遠く離れた鄙の地。都とは異なる風土の中で家持は多くの歌を詠みました。万葉集に残る家持の歌四七三首のうち、五年間の在任中に詠まれたものは実に二二三首にのぼります。



有磯高校の万葉歌碑
伏木から氷見にかけての海岸線は万葉の時代より「荒磯」や「有磯海」と呼ばれ、同校の名前もそこからとられた。歌碑は卒業記念として建立されたもの。



写真提供：備谷 廣司

この雪の

消残る時に

いざ行かな

山橘の

実の照るも見む

揮毫 中尾哲雄

この雪の 消残る時に いざ行かな
山橘の 実の照るも見む

天平勝宝二年(西暦750年)12月の雪の日に詠んだ歌
大伴家持(巻十九・四三六)

《歌の解説》

山橘とは、ヤブコウジの別称で、日本各地で見られる高さ30cmほどの常緑低木です。晩秋から初春にかけて小さな赤い実をつけ、正月の縁起物として親しまれています。

橘は古来、冬でも青々と葉を茂らせる「常盤木」として神聖視されていました。その実も「非時香菓」(時を選ばず香る果物)と呼ばれ、日本書紀では不老不死の実として登場しています。「越中の風土、橙橘あること希なり」と家持が言っように、当時の越中では、寒冷な気候から橘が自生しなかったと考えられます。橘をこよなく愛した家持は都から橘を持ち込み国府の庭先に植栽したと伝えられます。

この年は例年になく豪雪だったそうで、正月の積雪は4尺(約120cm)にもなり、家持は「腰なづみ」(腰が進まないほど)の大雪だと詠み表しています。

さて、この歌の「消残る時に」の句には、「消えない内に」と、残雪の頃にといい二つの解釈があります。雪花粧の山橘に風情はありますが、「腰なづみ」の雪が降る越中の風土を思えば、都人の家持が遠い春の訪れを願ったという方が自然かもしれません。

〈参考文献〉

引用はすべて笠間書院『越中万葉百科 高岡万葉歴史博物館編から』

※1-136ページ 万葉集巻17,3004の注釈より

※235-ページ 同巻19,423007より